梅鶯仏教壮年会報

第180号
2023年
1月22日

1月例会

期日：1月29日（日）
夕刻5時～6時

プログラム
お勤め
法話
『浄土真宗のみ教え』
《光の浄土》
仏教讃歌斉唱

※コロナ感染対策をして実施します。

ほほえみつつ　生きぬきー
ほほえみつつ　死にゆくー
それを、
まがりなりにも、
おぼつかないながらも、
そうさせてくれるものー
それは正信の宗教の信心

寺川幽響先生

（質問）天災によって犠牲になった方に因果の道理を当てはめて、悪果を納得させるにはどう説明したらよいでしょう迷いの世界をさまよい続けなければならないのです。

確かに私達の人生体験には必ず原因があり、その原因の多くは自身の行いから生じますが、一方で自然界の変化については個人の行為に直接的にかかわりがあるとはいえず、いわゆる「災害は天然の無常」です。

また命を失うことが悪果という考え方も、生あるものは必ず死に帰すのが因果の道理ですから、死ぬこと自体は個人の善悪の問題ではありません。

大事なことは、仏教が「因果の道理」によって示すのはもっと根本的な問題であって、「人間としての死にざま」を問題にするのではなく、「人間としての命を終えたあと（後生）」のことを因果として求めるのです。

「修善も雑毒なるゆえに虚仮の行とぞなづけたる」と親鸞聖人がご和讃で詠まれるように、私達凡夫がどんなに

そのことを悲しまれた阿弥陀さまが本願を起こされたのです。

本願を信じて念仏申す身になる（因）とき、浄土へ往生して仏となれる（果）のです。このことを因果の道理と

（質問）無宗教でも葬儀はできるのでしょうか？

葬儀を重要な宗教行為とする宗派もありますが、親鸞聖人が「親鸞閉眼せば、賀茂河に入れて魚にあたふべし」と仰られ、求道をないがしろにし、死者供養のみを目的とした葬儀を戒められたように浄土真宗では葬儀そのものに意味を求めません。

大切なのは、ご往生なされた方を縁として、この私がいよいよお念仏を悦ぶことに意味があるのです。

葬儀に宗教が必要か否かは、亡くなられた方の問題であり、なく私自身の問題であり、お念仏無しに葬儀することは寂しいことだと思います。

題材法話

前号からのつづき

漢字というのは、本来の字の意味を知るということが大事です。そこでいくつかの仏教用語の漢字の意味をたずねることから、お念仏を味わいます。

○「合う」「会う」「逢う」「遭う」「遇う」

「あう」という字は、「合う」「会う」「逢う」「遭う」「遇う」と実に沢山の字があります。

その中で、阿弥陀さまとの出会いには「遇う」ということが大きな味わいがあります。

それでは一つひとつの字の意味をたどりながらみましょう。

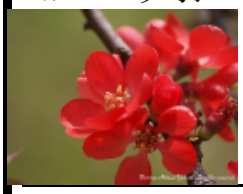
まず「合う」は「服が合う」、目と目が合う、

う」、「駅前で会う」というように別れるの反対の意味の言葉として使います。

「逢う」も「会う」と同じ意味ですが、「めぐり逢う」とか「ここで逢ったが百年目」というように少し劇的に会う時に使います。

そして「遭う」は「交通事故に遭う」「ひどい目に遭う」というように「好ましくないことに会う」時に使います。

最後に「遇う」で



す。

一般的には「偶然に遇う」というように「本来会えるこのない人やものに遇うことができた」という意味で使います。

「遇う」は「阿弥陀様の働きは「恒」の字も「恒」と「常」の二つがありますが、阿弥陀様ではなく「常」という字を使います。

ここにも大きな味わいがあります。

まず「恒」という字は、「あの人は恒に酒を飲んでいる」というように使いますが、この時のつねは「しょっちゅう」という意味であって、「途切れることなく」という意味ではありません。24時間飲み続けることなどはあり得ませんし、あくまでも四六時中ということです。

いるということです。

この「常に」という字も「恒」と「常」の二つがありますが、阿弥陀様の働きは「恒」ではなく「常」という字を使います。

ここにも大きな味わいがあります。

まず「恒」という字は、「あの人は恒に酒を飲んでいる」というように使いますが、この時のつねは「しょっちゅう」という意味であって、「途切れることなく」という意味ではありません。24時間飲み続けることなどはあり得ません。

六時中ということです。

対して「弥陀の光明は常に我が身を照らす」の「常」は、「心臓が動いている途中」の「常」となり使うように「途

す。

ところが阿弥陀さんの方は私が忘れていても、片時も忘れることなく「常」に私に願いをかけ続けておって下さるのです。この「常」に深いものです。

○「行く」「往く」

最後に「浄土往生」の「往く」という字です。

私達の最終目標はお浄土へ往生することですが、お浄土へ「ゆく」という字は「行く」ではなく「往く」という字を使います。

ここにも大きな味わいがあります。

「行く」も「往く」にも同じように、目的地に向かって進むという意味ではあるのですが、「往」は漢和辞典に「ずんずん進む」と書かれています。

こんなとこ